

古墳時代社会の諸変革

—人・もの・情報の流れを通して—

富山 直人

●論文の課題と目的

古墳時代の研究は、古墳に表された有力者間の関係を説明することに力点が置かれてきた側面がある。さらに、上位有力者層と周囲の有力者層との関係についての説明等、中央からの視点が研究の中心であり、周辺地域の研究でも中央との関係性を立証することで論の成立をみる傾向にあった。その関係性を示すうえで、威信財の獲得が大きな問題として取り扱われた経緯があり、それらは、再分配経済の枠の中での研究といえる。

本論では、これらの研究成果を尊重しつつ、地方の実態を明確にすることで、その独自性と地域が持つ周辺との関係等、新たな視点からみた地域のあり方を復元することをひとつの目的としている。また、古墳時代中期以降の社会変化を、集落ならびに古墳双方の観点から復元することに努める。その場合、地域の中心人物だけにとられることなく、一般の集落の動向に目配せを行い民衆史の復元に最大限の努力を払う。この目的において、集落は独立して存在するのではなく、再分配経済社会の中に組み込まれているとの観点に基づき、それぞれの社会の変化と共に、流通経路に変化が起こると想定し、流通経路の変化も考察の大きな柱とした。流通経路の変化は、モノや人や情報の動きの変化として現れると考えられるので、その動向を復元するためのさまざまな方法を試みている。

また、これまでは、海外の研究成果を援用しつつ、日本の古墳時代が初期国家の概念に該当するかどうかの議論に終始してきたが、近年の動向としては、国家への発展過程は地域によって様々であることが明らかとなっている。

そこで、現時点で日本の古墳時代のどの段階が初期国家に該当するかといった議論ではなく、社会発展過程の諸要素を改めて、検証し提示することが重要と考える。

その諸要素をアジア諸国などと比較可能にすることが、今後の議論を発展させる上でもっとも重要な作業となろう。

本論での古墳時代中期とは、円筒埴輪における B 種ヨコハケの出現以降で、須恵器出現以降を対象とする。具体的には TG232 型式以降であり、実年代としては 4 世紀末以降を対象となる。また、地域としては、現在の近畿地方を研究の対象地域としている。

本論では、古墳並びに集落、人・もの・情報の動き、流通経路、渡来人をキーワードとして社会の変化を時期的に区分し、その中で、諸要素の実態を明らかにすることを課題とする。

●論文の構成

- 序章 本論の目的
- 第1章 古墳時代と基礎社会 一人・もの・情報の流れを通して一
- 第2章 古墳時代中期の古墳と集落からみた対外交流
 - 第1節 播磨における古墳時代中期の政治変動 一古墳と渡来人の動向を中心として一
 - 第2節 播磨における古墳時代の集落 一渡来人の動向を中心として一
 - 第3節 摂津・河内の集落と流通経路
- 第3章 横穴式石室の導入と対外交流
 - 第1節 横穴式石室内部の利用実態とその変化過程
 - 第2節 芝山古墳の検討
 - 1.芝山古墳
 - 2.摂津周辺の九州系横穴式石室
 - 3.九州系石室の分布とその存在意義
- 第4章 横穴式石室からみた地域間交流
 - 第1節 前方後円墳への横穴式石室採用動向
 - 第2節 大和周辺地域における実態の確認
- 第5章 原始から古代へ国家成立への発展段階
 - 第1節 大和における石室分布の実態と時間的变化
 - 第2節 大和周辺地域の動向と画期
 - 第3節 群集墳の動向と父系制社会
 - 第4節 石室の移入の実態とモデル化
 - 第5節 石室伝播からみた社会関係の実態
 - 第6節 社会復元に向けて
 - 第7節 まとめ
- 第6章 流通から見た国家形成過程 まとめにかえて

●論文要旨

第1章 古墳時代と基礎社会 一人・もの・情報の流れを通して一

古墳時代の集落からは、防御設備に乏しく、日常的な戦争等の緊張関係は看取されない。古墳から読み取れる王権の強固な存在感に比べ、集落ではほとんど実態がないかのようにある。そこで、当時の社会を想定すべく、幾つかの状況を民族誌も援用し、G. ドゥルーズ以後再評価が進む、G. タルドの「模倣論」を中心に据えながら、個人に注目して社会の復元を試みた。その場合、軍事的強制権がない社会におけるリーダーは、日々努力が必要で、その地位は、世襲制とはならず、かなり不安定なものとして結論づけた。さらに、食料の獲得、広域ネットワークについても言及した。

第2章 古墳時代中期の古墳と集落からみた対外交流

この章で集落と古墳の研究から、日本の社会の発展過程・中央と周辺地域の社会の実態を論じている。特に、格差は古墳からは読み取れるが、集落からは認められない状況を確認する。その上で、豪族居館は、生活的要素に乏しいことから、居住用かどうかの議論をもとに、格差を示す要因となるかについてもその意義を問い直した。また、手工業生産の専門化は、渡来人の動向を中心に再考を行い、開始時期について明らかにした

第1節 播磨における古墳時代中期の政治変動 ―古墳と渡来人の動向を中心として―

出土した埴輪を分類し編年を行った。さらに、出土遺物や長持形石棺の変化などから、播磨の古墳時代中期を3段階に分類した。その3段階は、王権にとって交通の要衝であった段階（1段階）、独自の渡来系要素の受容が認められる段階（2段階）、王権の中に徐々に再編成される段階（3段階）として理解した。

これらの段階は、中央政体における対外交渉のあり方の3段階変化に対応すると理解した。その上で、検証を重ね、前方後円墳から墳形が変化しても、一律に規制として捉えるべきでないことを明らかにした。

第2節 播磨における古墳時代の集落 ―渡来人の動向を中心として―

播磨における5世紀の集落内部での変化を探った。詳しくは、手工業生産における専門制は認められず、集落内部での格差は不明確で、中期前半と後半でも規模による格差の進展は僅かであった。

さらに、南あわじ市木戸原遺跡は、大型の竪穴建物と柵で囲まれた掘立柱建物があり、その南部に玉を使用した祭祀場、北側には小規模な玉造や鍛冶工房を内包する居住域が、縦軸上に並んで構成されている。遺跡の中心的な時期は、TK73型式～ON46型式である。この木戸原遺跡は、建物の規模や集落構造が周辺遺跡と対比しても傑出したものであり、強い外部との関係の上に成り立っている交通の要衝上の集落と考えられる。播磨の変化と木戸原遺跡の存在、和歌山県鳴滝倉庫群・奈良県南郷遺跡群の存在から、5世紀初頭には流通経路が淡路島の南を通るルートへの変更が起きたと結論付けた。

第3節 摂津・河内の集落と流通経路

各集落は1集団が集住化の促進によって規模が拡大したのではなく、複数の集団が区画された範囲ごとに隣接して居住していると結論づけた。そのため、集団は大きなまとまりへと進まず、分節化した状態で、相互に協業を行うことによって成り立っていた。

神戸市松野遺跡における掘立柱建物の率が高くなり、在地的な建物群の様相とは異なると考えられる。おそらくは、海上交通の祭祀を執り行った場所であると考えられる。また、関連施設としての神楽遺跡で、内外からの移動者たちを補給させ、逗留の場の提供と補給物資の見返りとして積荷の交換が行われたと思われる。その役割から見て、単なる在地的要素だけでは、松野遺跡の集落は理解できないものと考えられる。

大坂府安威遺跡では、TK73型式並行期には外来の甗の受容が認められるが、その後は独自に変遷を遂げている。外来の甗は平底が基本であるが、在地に定着した甗の底は丸みを帯びており、外面はハケメによって仕上げられている。このように底部が丸みを帯びた甗

は六甲山南麓や明石川流域ないしは山城地域でも認められるが、この安威遺跡の事例が今のところもっとも古い事例のひとつであろう。よって、北摂地域を発信源として、周辺地域と甕の変遷が一致することは、TK23 型式前後の時期には、明石川流域から安威遺跡まで、流通経路として交流があったと考えられる。それに対して長原遺跡の甕の変遷からみて、長原遺跡から摂津への影響は認められないのが現状であろう。

5 世紀後半になると淡路島北ルートが中心となり、大坂府葦屋北遺跡、法円坂倉庫群、松野遺跡がセットで機能していたと考えられる。海上交通は、淡路島東岸以東の領域を保持するに留まる。遠方までの流通経路の整備と確保は、点的な関係性によって担保されているものであって、直接整備主導するものではない。道路は、大和や河内から外部へ伸びない。なお、淡路島北ルートは、大和川流域と共にある程度淀川流域も東への流通経路として機能していたと考えられる。

この淡路北ルートは、そのまま 6 世紀前半までは継続すると考えられる。しかし、5 世紀末には、東へのネットワークは、九州地域との連携による補完的な複数の流通ルートが開拓される。これに伴い、流通経路は、6 世紀前半には二重構造が出現する。

5 世紀から 6 世紀にかけて、流通経路は、常に一定ではなく、動きがあることが理解できる。本来、流通経路の変化は、前期以来の再分配経済において、システムそのものの変化を示すものと考えられる。そのことから、社会が前期以来、安定して発展したのではないことの査証となろう。つまりは、古墳時代の社会は、変革を遂げながらも、相互互助的なネットワークの温存や量的な差の社会の継続など古い要素を払拭することなく移行してきたといえる。

第 3 章 横穴式石室の導入と対外交流

九州系と百済系の石室を複数の項目で分析し、分布からその意味を探った。

第 1 節 横穴式石室内部の利用実態とその変化過程

大坂府芝山古墳をはじめとする近畿地方における九州系の横穴式石室の遺物配置から、その傾向を分析し、大和で通有認められる百済系の横穴式石室における遺物配置や木棺の配置との違いを明らかにした上で、時期的変化から、その融合のあり方を明らかにした。

第 2 節 芝山古墳の検討

1. 芝山古墳

大英博物館所蔵資料を資料化し、資料に基づき、芝山古墳の石室内の出土状況を復元した。

2. 摂津周辺の九州系横穴式石室

播磨から丹波への九州系石室の分布実態を明らかにし、伝達経路を想定した。

3. 九州系石室の分布とその存在意義

石室並びに石室利用の実態から九州系の人による人的交流を明らかとしたが、その石室の分布を確認すると、姫路市丁古墳群から加古川市剣坂古墳や状覚山古墳群を経て、篠山市井原至山古墳や多利向山 C-2 号墳、そして亀岡市医王谷古墳へ至るルートが復元できる。

これらのルートはまさに明石海峡を通らない裏街道にあたる。

これにより難波津を中心とした朝鮮半島との直接的なルートとは別に、九州系の補完的なルートが存在したことになる。これは、単一のネットワークでは健全に機能しなくなりつつあった状況が見て取れる。さらに、6世紀初頭に広まりを見せる横穴式石室は、大和・河内周辺では百済系の石室が優勢となるが、それ以外の地域では、九州系の石室が多く分布している。これは、5世紀では渡来人を中心に、朝鮮半島と大阪湾岸との交易であったものが、5世紀末以降、その継続と共に九州系の人々を担い手とし、九州各所を経由する日本の広範囲の地域を対象としたふたつのルートへと変化したことを意味している。

流通経路は、大陸からの直接的なネットワークと、九州との連携によるネットワークの二重性として捉えることが可能であろう。そして、九州系石室の分布をみる限り、MT15型式を中心とした時期には広域ネットワークは二重性を含みながらも、九州・淀川グループが凌駕しつつあったと考えられる。この二重性が、ある種の対等な競争を生み、社会は発達するきっかけとなったといえる。

第4章 横穴式石室からみた地域間交流

横穴式石室を通して6世紀の社会を通観する基礎的作業を行っている。前方後円墳への横穴式石室の導入、ならびに各地への石室情報の伝播のあり方を検証している。

第1節 前方後円墳への横穴式石室採用動向

各地域における横穴式石室の導入と前方後円墳への埋葬施設としての採用状況をみると、北摂地域並びに近江地域が先進性を示しており、その中心は北摂の今城塚古墳と考えられる。そして、前方後円墳へ採用された横穴式石室をみると、近江から北摂にかけては、共通性や系譜関係が認められるのに対して、その周辺地域では、それぞれの地域で独自の石室形態を採用している。また、南塚古墳より遅れて前方後円墳への石室の導入が行われる大和でも、北摂地域との類似性には乏しい。

さらに、大和地域が横穴式石室を前方後円墳に採用して以降、全長100mをこえる前方後円墳が集中する傾向にあり、両勢力の対立は、大和優位へと移行し、帰着を迎えたと考えられる。

大和で横穴式石室を埋葬施設として採用する前方後円墳が普及し始めると、前方後円墳の規模に基づく階層表現が再構築されるようになる。しかしながら、このころまでは、摂津の南塚古墳からの流れとしての石室系統と、大和で新たに創設された市尾墓山古墳や東乗鞍古墳の石室系統の2系統が並立しており、石室全体についても統一感に欠ける状況が続いていた。その2系統は、内部の利用状況からみても、葬法や系譜関係において全く別の石室系統として併存しているのである。

第2節 大和周辺地域における実態の確認

大和・河内で中心的な石室形態が周辺地域にどのような影響を与えているかを、基礎的に検証し、それを元に、地域間の情報の流れ、さらには関係性を明らかにした。

第5章 原始から古代へ国家成立への発展段階

横穴式石室の研究から、6世紀の社会について検討を行った。

第1節 大和における石室分布の実態と時間的变化

独立墳から群集墳への横穴式石室の構築に関する情報の移入のモデルケースを明らかにした。

第2節 大和周辺地域の動向と画期

4章第2節の成果を元に、地域の動向を整理し、中央の状況と周囲への拡散状況から、画期を設定した。

TK43 型式並行期には、大坂府一須賀古墳群W (WA) 支群並びに高安千塚古墳群では、大和とほぼ、同じ動きをすることが確認できた。そして、南河内では、TK209 型式並行期以降、大和と同じ動きをすることも看取することができた。

それに比べ大坂府山畑古墳群は、石室の石材の用法等は、遜色がないにもかかわらず、袖部の造りに崩れが生じている。このことから、山畑古墳群の所在する河内郡からが、大和の石室文化圏外として、1段下がるようなあり方を示している。

北摂では、在地化による左片袖を中心とした石室群へと変化していく中で、山畑古墳群よりもブレが目立ち始めている。

TK209 型式並行期には横穴式石室の大和の基本形が普及しはじめ、播磨ではすべてが越塚形態となっており、牧野形態は兵庫県西野山9号墳1基のみである。このように、大和でみられた石室の階層性は外縁地域への普及においても正確に守られており、最上位に位置する牧野形態は殆ど築かれていないのである。

このようにみても、前方後円墳築造段階には大和内部でも、またその周縁社会との関係においても、量的な差による社会と考えられる。TK209 型式並行期以降に出現する石室の階層性は、格差を規模の差で表すことからの脱却でもあった。その視点で、改めてみると、大和における最上位の石室を普及させていない状況が読み取れるのである。とするならば、この時期に多数存在する地域の個性を残した石室群と共に、点的ではあるが、中央政体に従属するような地域が存在し始めたと考えられる。

第3節 群集墳の動向と父系制社会

石室の埋葬原理を復元し、2棺埋葬から、多数埋葬への移行時期を探った。結果としてTK10 型式新段階～TK43 型式並行期にかけての時期に多数埋葬の盛行が認められる。よって、この頃に、2世代埋葬が一般的になると考えられ、父系制への移行時期が推定できる。

第4節 石室の移入の実態とモデル化

摂津までの範囲を中心に対する周縁地域と捉え、播磨などの地域は、その外縁地域として捉えるべき地域とし、石室情報の流れをモデル化した。

第5節 石室伝播からみた社会関係の実態

石室の各地への伝播状況から、TK209 型式を画期として、情報の制限の開始を確認し、量的格差からの脱却という大きな社会の変換点とした。

第6節 社会復元に向けて

大和においては2系統並立段階から量的な差の段階をへて社会の重層化は進むが、播磨ではそのような動きは取らず、社会の発展は、地域によって異なる。

第7節 まとめ

2系統の段階から融合の時期と父系制社会への移行に基づく基礎的社会集団の構成が安定的な段階へと移行する時期を経て、最上位の石室群と、下位の群をもうける動きは、対等な競合の段階を経ることによって出現した量的な差からの脱却ととれる。ただし、6世紀の社会は、地域ごとに様々な社会レベルが混在しており、社会の発達には温度差が生じている。

第6章 流通から見た国家形成過程 まとめにかえて

以上の点を社会発展過程としてまとめると、5世紀前半は、格差が集落内部で進まず、建物の機能分化は、ごく一部の地域以外では認められない。集落の人口増加や集中は、進まず、都市の存在は認められない。また、大和・河内の周辺地域では、前方後円墳の築造は停止する傾向にあり、古墳祭祀の共有は崩れたと思われる。手工業生産は、集落内部で小規模な工房は認められるが、専門化を認めるには至らない。一方で、巨大な前方後円墳が河内で築造されるなど、中心は、大規模な労働力の確保とそれを組織する指揮命令システムを保持していた。よって、日常生活における格差と古墳築造活動における格差は異なっていたと考えられる。それは、そのまま、集落から見た社会と古墳から復元される社会とのギャップとして存在する。

5世紀を通して、畿内とその周辺部は、父系社会への移行は認められない。また、常備軍の存在は、一部地域を除いて、否定的な状況にある。さらに、格差の表現が墓において顕著であって集落内部での格差は希薄である。

5世紀後半には、格差は、一部に量的な差から質的な差への転換が試みられるが、継続性に乏しく貫徹しない。集落内部では量的な差がやや進む傾向も認められる。都市化は進まず、小規模な集団の接続型居住が主流を占める。

6世紀前半には、社会は、前方後円墳と横穴式石室を利用した前期以来の関係性の再構築と新たな葬制と祭祀の共有を目指すようになる。流通経路の2重性は、相互のネットワークが対等に存在し、競合することによって刺激を与え、社会発展の起因的な出発点となっていく。大和・河内周辺部では、親族形態は、父系制社会への移行が認められる。

畿内全体で、6世紀後半には親族形態は父系制社会への移行が進展するが、貫徹するには至らない。流通経路の2重性は解消され、個別社会の連携が再構築される。量的な差が進み、墳丘規模や石室規模などで複数の格差が存在するようになる。それでも、各地の外部への発進力は弱く、同一の石室を共有するような点では極限られた範囲にとどまる。一方で、武器の普及はすすみ、保有者は増加した。

7世紀に入り、前方後円墳の築造停止と共に、量的な格差表現から質的な格差表現への転換が認められる。これにより、社会構造は大きく発展する方向が示されたと理解できる。これは、前期以来の量的な格差表現の停止でもあり、古墳時代の終焉とも評価できる。